

神経症的不安に見られる敵意について

— Watson 投影法の検討 —

浅 地 明

Asaji AKIRA

I 問 題

不安という概念については、キエルケゴールを初めとする実存哲学者によつていろいろと論議されているが、心理学でこれを説明しようとするれば「恐れ」との区別が困難となつて来る。不安についても現在考えられている特徴を要約すれば 1. 不安は現象として恐れに似ているが、恐れほど対象が明でない。2. 不安には非合理的なものが含まれている。3. 不安は劣等感を多分に含んでいる。4. 不安は恐れよりも持続的である。と、だいたい以上の様になるが、勿論恐れとの絶対的区別はつけ難い。Freud は不安を性からいろいろと説明しているが、これはいささか妥当を欠く点がある様で、むしろ Horney, K が「不安は抑圧された敵意から生ずる」と述べているのが妥当であろう。

精神分析の理論では、性、敵意、不安、に過去数十年の間神経症の決定要因としての重要な役割を与えている。種々の神経症の徴候は不安に対する防衛の特殊な群 (Constellation) の行動結果として考えている。特に抑圧された敵意の衝動が人間の自我を圧倒して Panic を生ぜしめるのだと考えているが、ここに不安——敵意——神経症と一連のつながりで結ばれている事が考えられて来る。

Horney は更に「神経症的な人間の幼児期を調べると、多くの場合、真の愛情の欠如が見られる。幼児期に於て親に抱いた敵意が抑圧されて不安を生じ、その不安が大人にまで持続する。この抑圧された敵意は投射され、敵意を抱くのは自分ではなくて他人であると考えられる」と述べている。こういつた精神分析に基礎をおく考えは、いわゆる基礎的不安 Basic Anxiety と呼ばれるものであり、不安には別に「現実不安」と呼ばれる抑圧された敵意や葛藤よりも主として欲求不満によるものがある。緊張を続ける国際情勢、経済的貧困、複雑な対人関係、多忙等、大なり小なりの欲求不満が現代人をして不安に導くのは当然と云えよう。我々がここで取扱う調査や実験は、これには直接ふれない。前者の精神分析理論により発展した神経症的不安の問題を取扱うのである。

上に述べて来た様な事から次の仮説が引出されよう。即ち、1. 神経症は正常からの量的偏差である。⁽¹⁾ 2. 神経症的不安は抑圧された敵意によつて生ずる。⁽²⁾ 3. 神経症的不安は、この状態の明白な徴候と呼ぶべきものを記述させる項目よりなる筆記テストによつて確める事が出来る。⁽³⁾

以上の仮説から次の実験仮説が引出される。神経症的不安を確めるテストによつて高い神経症不安の傾向を示した者は、(HA) 抑圧された敵意の衝動の表出が許される条件の下では、低い神経症的不安の傾向を示した者 (LA) よりもより敵意を示すであろう。

II 方 法

1. 調査

Taylor の manifest Anxiety Scale の調査。⁽⁴⁾

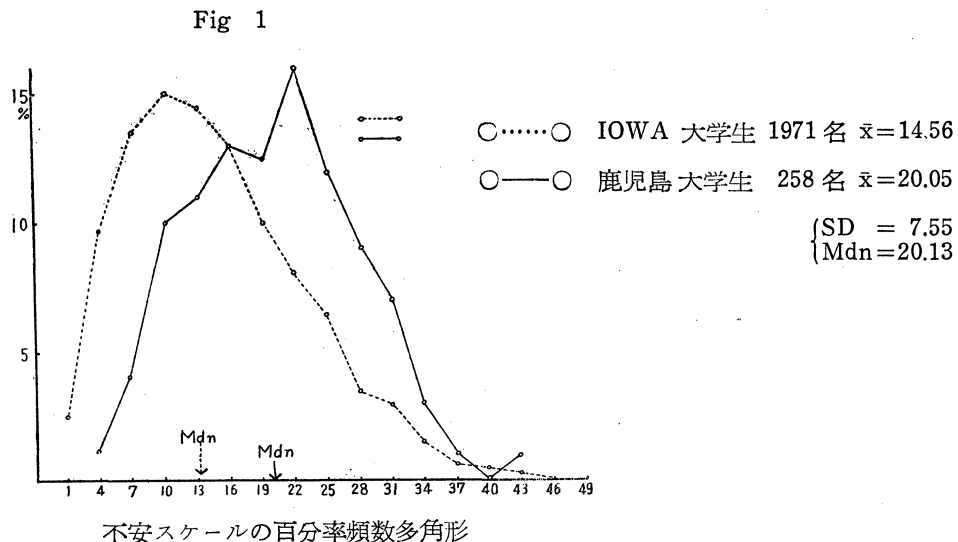
このスケールは目蓋の条件づけの研究に用いるために、Taylor によつて新しく作られたものであつて、ミネソタ性格多面録 (MMPI) から約 200 項目が臨床家によつて manifest Anxiety として 80% 以上の一致で抽出された 65 項目を 50 項目に整理して出来ているものである。例を示せば

1. 私は疲れ易い方ではない。(いいえ)
10. 私は月に一度又はそれ以上下痢をする事がある。(はい)
14. 私は二、三日毎に夢をみてうなされる事がある。(はい)
25. 私はすぐに当惑し、まごつき易い。(はい)
30. 私はすぐに泣く。(はい)
37. 私は、実際はたいした事でもないのに、くよくよ悩む。(はい)
42. 私は時々気が高ぶつて眠れぬ事がある。(はい)
43. 私は常に自分を気にする。(はい)
50. 私はいつもお腹が空いている様な気がする。(はい)

50 項目を「はい」「いいえ」で反応させ、神経症的不安の得点は 0~50 に分布する。50 は最も高い神経症的不安を示し、0 はその反対を示す。

調査人員。鹿大教育学部学生男女をランダムに抽出し計 258 名に実施。

調査結果。Fig 1 に示した。



Taylor の報告によると Iowa 大学学生 1971 名の調査結果は、散布度が報告されていないので直接比較は出来ないが、平均 14.56 で鹿大学生の結果は平均 20.05 である。一般に鹿大学生の方が高い神経病的不安を示している事がわかる。

テイラーの報告による 103 名の精神病患者の分布は Fig 2 の通りである。

被験者の抽出。

上の調査結果から 33~44 点をとつた者を 12 名 (男 6 女 6—90~100% ile に当る。及び 3~8 点をとつた者 12 名 (男 6 女 6)—5~10% ile と計 24 名を HA (High Anxiety) グループ, LA (Low Anxiety) グループとして抽出した。

2. 実験 (Watson 投射法)

この実験に使用した Watson の Projective タイプのテストは 60 の文より出来ていて、一つの文はそれぞれ散らばつた語のどれか一つを

取去る事によつて、二つの意味をもつた文が出来る様になつている。例えば「開け、窓、破れ」は「窓を開け」と「窓を破れ」という様に敵意語又は中性語のどちらかの選択によつて二つの意味が出来る。この場合「窓を破れ」が敵意の構成として見做すわけである。実験では被験者は最初に思いついた文を出来るだけ早く報告する様に要請された。

実験を行うに先立つて実験自体に影響を与えない 4 個の絵を見せ、最初心に浮んだ印象を報告する様にさせた。これは被験者の心を静め、反応しにくいものに反応する「心的構え」を作り出す事を助けるために企てられた。

Table 1 に示した 60 個の文はタキストスコープにより被験者に呈示された。提示の順序は Table 1 の通りであるが、最初の 30 は被験者が文を作るのに必要とするだけの時間を与え、次の 30 は被験者の防衛を出しぬく意味で短い露出時間を与えた。

正確な手続は以下の通りである。

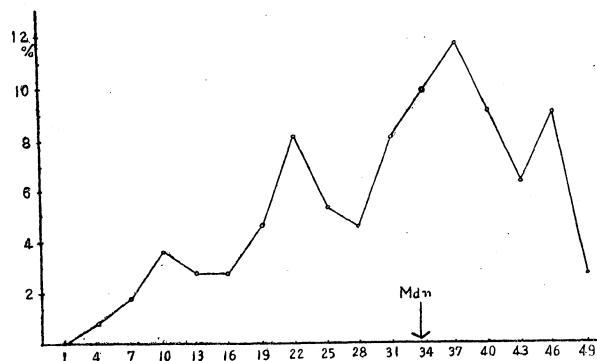
実験導入の 4 個の絵と説明の後に、被験者が反応するのに必要なだけの時間が与えられた サンプルの文を示した。(但し敵意語は含まない)——「山、私、海、行く」又被験者が後で短い時間で反応しなくてはならぬ準備のため、同じような中性語よりなるサンプル文を 1/2~3 秒の間にわたつて与え、その被験者に適した露出時間を決定した。

最初の 30 のテスト項目は、露出時間は制限しなかつたがすばやく反応する事を要求した。2 番目の 30 項目は、1/2~3 秒にわたり被験者がサンプル文により決定した時間と同じ露出時間の制限を行つた。被験者が反応に失敗した時は、出来るまでくり返した。

III 結果 Table 1 に示した。(次頁)

HA グループと LA グループの平均を比較すると、HA の平均 27.58 (SD=3.32) LA の平均 25.92 (SD=3.29) $t=1.178$ $0.2 < P < 0.3$ 故に HA グループが高い敵意を示すであろうと云う実験仮説は否定された。各文共に両グループが等しい構成を行つたのは 6 ケースで残りの 54 ケースは異

Fig. 2



103 名の精神病患者 (神経症) による不安スケールの頻数多角形
Mdn は約 34 で IOWA 大学生の 98.8% ile に当る。

Table 1.

長 露 出 シ リ ー ズ					短 露 出 シ リ ー ズ				
文	敵意語を選択した被験者の数				文	敵意語を選択した被験者の数			
	LA	HA	HA>LA	HA<LA		LA	HA	HA>LA	HA<LA
1. 叩け (見よ) 蠅	11	10		1	31. (見よ) 叩け 蚊	4	3		1
2. (忙しい) 彼 のろま	7	10	3		32. 馬鹿 彼 (歩く)	8	9	1	
3. 腕 彼 切れ (テープ)	6	8	2		33. 手 彼 (握れ) 切れ	3	8	5	
4. (投げ) ぶつける ボール	3	2		1	34. 打つ ボール (もつ)	9	7	2	
5. 嘘つき (女性) 彼女	4	11	7		35. (男性) 詐欺 彼	10	11	1	
6. (聞く) 私 君 憎む	6	8	2		36. なぐる 私 君(つれる)	8	10	2	
7. 切符切れ (もて)	10	10			37. ピアノ (ひく) たたく	1	0	1	
8. (開け) 窓 破れ	8	9	1		38. 錠 壊せ (かけろ)	2	3	1	
9. 人 (菓子) 切れ	2	3	1		39. (パン) 心 冷い	7	6	1	
10. ぶどう (包め) つぶせ	5	4		1	40. みかん つぶせ(味わえ)	8	5		3
11. 私 君 (好き) 嫌い	2	5	3		41. 君 私 (話す) 困らす	3	5	2	
12. (車) ナイフ 動かせ	1	3	2		42. 振廻す (変える) 刀	7	6		1
13. 切れ 紙 (もて)	0	0			43. 材木 (積む) 裂く	1	2	1	
14. (運) 悪魔 与えよ 彼	10	9		1	44. 彼, 地獄 (時間) 与えよ	10	8	2	
15. 撃つ 私 君 (尋ねる)	1	2	1		45. (見る) 私 君 突く	3	4	1	
16. 卵 (料理せよ) 割れ	5	3	2		46. クリーム かき廻す (飲む)	8	6		2
17. ぶつとばせ 彼等 (知ら せよ)	3	2		1	47. (見つける) 焼け 彼等	4	2		2
18. 彼導け (こゝに) 死に	3	5	2		48. 彼 せよ 死ぬように (飲むように)	5	6	1	
19. ダテ男 嫌い (会つた) 私	10	11	1		49. 洪き虫 (会つた) 嫌い 私	9	10	1	
20. 彼 (許せ) 倒せ	2	2			50. 彼 私 なぐる (許す)	7	7		
21. 君 私 殺す (呼ぶ)	5	6	1		51. 君 私殺す (話す)	8	4		4
22. 着物 (売れ) 破れ	1	5	4		52. 縫い目 裂く (縫う)	3	5	2	
23. 君 使え 拳骨 (鉛筆)	3	1		2	53. 与える 彼 (坐席) 侮	1	2	1	
24. 子供 (調査する) 拷問 する	1	2	1		54. 少年熱狂する(訓練する)	7	5		2
25. 掘出物 値切る (発見す る)	6	3		3	55. 値だん 値切る (学ぶ)	6	7	1	
26. (よりわかる) 叫 彼等	7	9	2		56. 彼等 おとせ こゝに (呼べ)	0	0		
27. 首 (着物) つるせ	2	4	2		57. 彼 (給料) 頭 けずれ	5	7	2	
28. 釘 打て (数えよ)	9	9			58. 鋌 打ちつける (よりわ ける)	11	9		2
29. 行け 地獄に (眠りに)	10	9		1	59. 彼等 (見よ) 罰せよすべ て	5	6	1	
30. 君 (ペン) 銃 使え	2	1		1	60. 君 ピストル(ペン)使え	4	2		2

() 内の語は中性語を示す。

つた構成がなされた。その中で HA がより多くの敵意語を選択したのは 34 で LA が選択したのは 20 である。サインテストによるこの差は $X^2=1.1891$, $0.2 < P < 0.3$ 。特に多く HA の方が敵意語を選択したとはいえない。

短露出時間の場合。

この場合短露出によつて被験者の防衛を出しぬこうとして試みられたのであるが HA はさして変

化は見られず LA は長露出の場合 9 ケースが HA より高い敵意を示した（選択した）のが短露出により 11 ケースと増大し平均も 1.33 から 2.0 と増大している。何故 LA グループのみが増大したのかは明でない。

IV 考 察

被験者の抽出は HA は 33 点以上の者であり Fig 2 からわかる様に明に高い神経症的不安を示している。しかし彼等は精神病の患者でなく正常人であり学生であるからには、単にスケール上の類似のみをもつて精神病的神経症不安と同一視する事が無理であつた様である。

次に Watson 氏の投影法的テストであるが、⁽⁵⁾ 彼も述べている様にこのテストは TAT の理論にその基礎をおいている。つまり人間はアイマイな刺戟に対しては、その人自身の要求を加えたものを反応するという事実である。ばらばらに散らばつた語を短時間に構成する事を要求される場合、人は知らず知らずに自己の深層に横たわる抑圧や要求を投射して文を構成するだろうというのがこの実験の仮説となつているのであるが、実験後の考察によると問題はもつと複雑なものを含んでいる。第一に文章を構成するために語を選択しなくてはならない。ここに知覚的防衛の問題が存在する。この問題については Solomon, Howes⁽⁶⁾ 等は我々が日常で使用する頻度の多い語ほど選択的に知覚されるとの説を述べ、マクギニーズ McGinnies⁽⁷⁾ 等は一般に禁忌されている語は知覚されにくいとの説をなしている。知覚的防衛の問題でその後の実験で明かとなつた禁忌語に対する心構えが出来ていると反つてそれが見え易くなるという事実もある。

Postman⁽⁸⁾ は一般にこのような刺戟の場では刺戟と心的構えは非常に優勢であつて、人間の要求因子が勢力をもつ様な条件を作り出す事は比較的困難であると述べている。

実験結果について考察するならば、敵意語を含んだ文の構成が日常使用の頻度の高い場合敵意語の選択が多く（蠅を叩け、切符をきれ）Howes の頻度因子が全般を通じての決定因子となつている様な印象を受ける。語の配置は組織的に変化しているのでその意味での使用可能性はどの語も同一である筈だが、被験者が常に左から右へ見る場合、左側の語が選択され易く短露出の場合はこれが特に顕著であつた。又長い語は短い語に比して選択され難い傾向も認められた。又男女差によつて語の選択にかなりの相違も見られ、非常に複雑な問題が横たわる事を思い知らされる結果となつてしまつた。その他漢字と仮名、刺戟と反応の時間等実験条件を十分に統制して再実験を行つてみるつもりである。

最後に Watson 氏の報告による実験結果と比較すると、彼は精神病院に治療に通つている神経症患者 45 名と統制群 45 名との平均は 30.6 (SD=5.9) 26.2 (SD=6.4) で $P < 0.01$ と高い差を示している。特に「I hate you, I punch him, I'll hit you」等対人攻撃的な文の構成がめだつている。本実験では HA の平均 27.58 (SD=3.32) LA の平均 25.92 (SD=3.29) で患者グループ対 HA グループの平均の差は $t_0 = 2.122 > 基準 t = 2.021$ (有意水準 5%) と患者グループが高い敵意語の選択を示し、統制群と LA グループとの平均の差は $t_0 = 0.266 < 基準 t = 2.018$ (5% 有意水準) で差は認められなかつた。

V 要 約

高い神経症不安を示す者は敵意の表出が許される条件の下では低い神経症不安を示す者よりも多くの敵意を示すであろうという実験仮設のもとでテストが行われた。

神経症不安の程度を示すものとしてテイラーの不安スケールを実施して被験者を選択した。敵意の測定方法として Watson の Projective タイプのテストを行つた。結果として HA グループと LA グループとの間に差は認められなかつた。知覚的防衛の問題がテスト結果の重要な決定要因になる事がわかつた。

参 考 文 献

1. Alexander, F. Fundamentals of Psychoanalysis. 1951.
 2. Horney K. The neurotic Personality of our time. 1937.
 3. 4. Taylor, J. A. A personality scale of manifest anxiety.
J. abnorm soc Psychol. 48.
 5. Watson, R. E. Hostility in neurotics and normals.
J. abnorm. soc psychol 50 36~40.
 6. Howes. D. H. & Solomon. R. L.
Visual duration thresholds as a function of Word probabilitty. J. exp
psychol. 1951.
 7. Mc Ginnies, E. Emotionality and perceptual defense. psychol. Rev. 1949. 56.
 8. Postman. L. Is there mechanism of perceptual defense ?
J. ahnorm soc. Psychol. 1953 48.
- ~~~~~